

招聘 研究員

氏名	劉 珊珊 (LIU Shanshan)
所属機関等	北京師範大学文学院 民間文学研究所
受入期間	2019年11月21日～2019年12月10日
指導教員	小熊 誠 (チューター：郭 立東)
研究課題	新年の風習に見る中日の民俗信仰の違いについて



日本の一般大衆の生活様式が放つ魅力 ——実際に日本を訪れ、学ぶ中で感じたこと

劉 珊珊

日本の学者である岩本通弥は、『『民俗』を対象とするから民俗学なのか—なぜ民俗学は『近代』を扱えなくなってしまうのか—』¹⁾において、民俗学の研究が政治化する傾向に疑義を呈した。そして柳田国男の思想は単に民俗を対象としたものにとどまらず、「民俗を通じて研究を行う学問」の構築を重視したものであることを明確に示した。つまり、生活や文化を研究するのであれば、それは生活の中に身を置く人々や、そうした人々が依存する生活様式の背後にある意義と切り離すことはできないということである。

日本の社会心理学者である坂田稔はかつて、1970年代の日本の生活様式をまとめた。「例えば食生活においては米飯を主食とし、和洋折衷の副食を取ることを基本としている。衣料はほとんどが洋服であり、和服は晴れ着として使われている。住宅も畳部屋の座式と、これにダイニングやリビングなどの立式を併用した形になっている。さらに冠婚葬祭でも、結婚式や葬式の形式、お宮祭りや七五三のやり方もほぼ固定しているし、礼法でもお辞儀をする挨拶や中元・歳暮の類、またテレビ・スポーツ・旅行などを楽しむレジャーまで、およその形式が定まっている²⁾。」また民俗学者の阿南透は、こうした生活の在り方は現在まで続いていると考える³⁾。主に飲食、服装、住居、冠婚葬祭、レジャー・娯楽等の面から簡潔にまとめたこの一節を通じ、私は日本の一般大衆の基本的な生活様式について初歩的な理解を得ることができた。

2019年11月21日から12月10日にかけて、神奈川大学非文字資料研究センターからの援助のもと、私は

20日間にわたり日本を訪問し学習する機会を得た。言葉の問題があるため、日本の方々と直接対話による交流を深めることはできなかった。それゆえ私は、人々の行動表現、生活の場所、飲食という、比較的直観的に見て取れる三つの面からの観察・理解に基づき、日本の民衆の生活・文化について簡単に探っていった。それにより、日本社会が持つ明確な特質と、数多くの海外旅行者を引きつける魅力がどこにあるのかを明らかにしていきたい。

静かでありながら親切な日本人

中国人が日本を旅行する際、たとえ日本語がわからなくとも大きな問題とはならない。なぜなら私たちにとって、日本の大通りや路地裏に見られる漢字表記が個人旅行をする上で非常に便利である、という優位性がもともと存在するからだ。しかしながら、便利と言っても、制約を受けずになんでも思うがままにしたいことができるということではない。日本では、電車やエレベーターの利用時や、ショッピングモール、スーパー、レストランでの支払い時に、先に着いた人から並び厳格に順番を守る必要がある。日本人は終始一貫して整然とした高水準の秩序を維持している。この点は、多くの人が押し寄せる電車の駅において特にはっきりと見て取れる。朝晩のラッシュアワーにおいても、都市中心部に位置する慌ただしい駅においても、広々として明るいプラットフォームで聞こえてくるのはせわしなく行き交う人々の足音だけで、一切の乱れがない。乗客はまるで歩行可能なロボットのように、自らが前進するルートがはっきりと決ま





親切な日本のおじさん



日本の秩序ある文化

っており、指令を受けない限り一切の音を発することがない。また、車内でも大きな話し声を耳にすることは極めてまれである。夫婦間や友人同士でコミュニケーションを取る必要がある際は、手で口を覆い、声を最小限に抑えようと努める。すべては他人に迷惑をかけないことが前提となっている。

私が滞在したのは神奈川大学国際寮だった。地下も含めると全部で6階建てで、1人1部屋が割り当てられる。1階と地下1階が公共の活動スペースとなっている以外、2階以上は各階に20室が配置され、キッチン、バス、トイレ、洗濯室といった共有空間も備えている。部屋から出入りするたびに、長い廊下を通り抜けるのだが、同じ階の他の学生を見かけることはめったにない。昼夜を問わず、建物全体が静かである。自分の階には本当に人がいるのだろうかと思ったことすらある。その後特に注意して見ていると、日が暮れた後、国際寮の中で一室また一室と明かりが灯っていた。これでやっと、隣の部屋にも人がいて、その隣の部屋にも人がいることがはっきりした。寮の中は静かで、寮の外の通りも、時々車が通り過ぎる音がするだけで、同じように静かだ。

日本社会はよどみなく流れ、秩序正しい。その背景には、子供の頃からの教育があるが、より重要な要因は、日本人が持つ「他人に迷惑をかけない」という生き方の信条である。現地の日本人大学生によれば、実家に帰って家族に迷惑をかけてはよくないから、年越しの際もキャンパス内（下宿先）にとどまるのだという。さらに不



静かできれいな通り

思議なことに、ある大学生が休日に実家に帰ると、「あんたなんで帰ってきたの？」と母親に驚かされてしまったのだという。他人に迷惑をかけないことで、人と人との間に最大限の自由な空間が保証される。このためにはまた、相互に高い水準の自律性を発揮することが必要となる。過ちを犯せば、強烈な恥辱感にさいなまれる。社会から追放されるのみならず、自身の心もまた、自らを受



け入れることができなくなる。こうした日本人は冷やかで薄情なように思われる。しかし実際はけっしてそうではない。

横浜に到着してまもなく、私は重たいスーツケースを引きずりながら駅を出て、タクシーを探そうとあたりを見回した。その時、公共の秩序の維持を職務とする青い制服の男性が二人、目の前に現れた。私は急いで非文字資料研究センターの成田さんからいただいた住所を取り出し、英語で質問した。彼らは親切に道案内をしてくれ、タクシー乗り場まで送ってくれたばかりか、自らすすんでスーツケースも引いてくれた。また、外部での見学时、レストランの利用の仕方がよくわからなかったのだが、見知らぬ日本人の母娘が親切に実際にやり方を見せてくれた上、私に代わって注文してくれた。私が今から行くところがあると伝えると、娘さんはまず母親の意見を聞いた上で、そこまで一緒に行くと私に言った。移動の途中、その母親は足が悪いため、娘さんが常にその高齢の母親を支えていた。ある中国人留学生が、日本人

は実際には、外見は冷たくても中身は温かいのだと言っていた。長い間連絡を取っていなかった友人であっても、相手が困った時には持てる力を尽くして相手を支える。

上品かつ実用的な日本の住宅

日本家屋を体験してみたいと思い、11月20日の夜、私は羽田空港付近の民宿に泊まった。予約の際、電子メールでスタッフと連絡を取り、空港から民宿までの交通ルートは無事教えてもらうことができた。電車、タクシー、バスの乗り方はもちろん、これら三つの交通手段で必要となる時間と金額まで詳しく説明してくれた。この民宿は東京の静かな郊外にあって、人はあまり多くなく、交通量も少なく道も広々としているため、きっと食後の散歩に適しているのだろう、と私は想像していた。

スタッフが案内してくれた通りに、私は電車の駅を出た。目の前には、依然として見慣れた都会の風景が広がっている。慌ただしい4車線の道路、堅固でがっちりとした高層ビル、スーツを着た会社員。裏通りへと曲がり、やっと段々と静けさが増していった。狭い道路は清潔で整っていて、両側には素朴な色合いで上品な日本家屋が密集していた。壁面は基本的に素材そのままの色だった。日本家屋は上品でコンパクトだ。門から入るとすぐ玄関がある。入り口から一段上がったところにスタッフがすでにスリッパを並べてくれている。外出時に履く靴は左右両側に収納される。壁際には玄関イスも一脚置かれている。正面入り口のちょうど向かい側に階段があり、左側には応接間と厨房がある。1階にはほかにも洗濯室、洗面所、浴室がある。客間は2階に集まっており、合計3室に加え、男性・女性用トイレがそれぞれ1カ所ずつある。客間は畳敷きの和室で、就寝時には布団を敷くのだが、床の上に寝ているという感じはしなかった。シンプルかつ実用的というのが日本家屋の最大の特徴である。

日本人は家の前にさまざまな色の草花を植えることをとても大事だと考えている。時には石を使って飾りつけることもある。軒下の狭いスペースにすぎなくとも、これにより家屋が生き生きとした活気に満ちてくるのだ。比較的大きな庭のある家であれば、緑が生い茂り、飛び石が建物と建物の間を結ぶ。庭全体が紅葉に包まれる優雅な趣を一望できる。その後滞在した国際寮からは、このような生き生きとした自然の息吹を感じることはできなかった。入り口は平地で、学生たちが自転車を止められるようになっている。その上はバルコニーだ。この平地部分の真ん中には、1本のカエデの木が高くまっすぐに伸びている。2階のバルコニーには、その木がさらに上へと生長できるよう、丸く穴が空けられている。おそらくこの寮では、1年の四季を通じた風情はこの木によ



裕福な家庭の大きな庭



庭の一角





国際寮の庭にあるカエデの木

りもたらされるものだけなのかもしれない。横浜に到着してまもなく、カエデの木にはまだ少なからず紅葉が残っていることに気がついた。まるで赤いダンススカートをはいて誇らしげにしている少女のようだ。しかし暴風雨が吹き荒れた後、そのカエデの木は瞬く間に年老いた老人へと姿を変えてしまった。地面を覆う紅葉に心を揺さぶられる。栄華の中に衰退を見る。満開の中に零落を見る。生の横溢の中に死の静寂を見る。これがまさに日本人の言う、物の哀れというものなのであろう。最終的に行き着く先は、はかなくも美しい静けさである。

多くの要素が入り交じり、手の込んだ日本料理

日本料理には実にさまざまなスタイルや種類があり、細かなところまで作り込まれ、栄養にもこだわっている。さらには形や色彩の調和が特に重視され、「目で食べる」料理と評されている。もっともよく見られる日本の食べ物としては天ぷらがある。魚介類、野菜、鶏肉に粉をまぶして黄金色に揚げたもので、醤油、生姜、砂糖等で作ったつゆと合わせて食べる。ラーメンは日本でもっとも人気のあるグルメの一つで、大抵どの街角にも一軒はラーメン店を見つけることができる。特製の汁にチャーシュー、のり、ネギ、味玉等を合わせる。出汁の美味しさがラーメンの良し悪しをそのまま決めてしまう。ほかにも日本人は特にカレーが大好きだ。インドカレーをベースに、刺激的な辛みを減らし、すりおろしたフルーツを加えており、味付けは比較的甘めだ。また日本の一般家庭では、ハンバーグが定番料理の一つとなっている。どの母親も作ることができる料理だという。ハンバーグの起源は、米軍が日本に駐留していたときに現地の飲食文化が持ち込まれたことと密切に結びついている。日本人はその中身の材料構成を、牛肉100%から牛肉と豚肉の合挽きへと改めた。さらには卵、野菜、米飯、独特のソースを加えた。



日本のラーメン



日本の寿司

今回の訪日で、片時も忘れられない体験となったのは、やはり寿司だ。数年前、BBC 放映の「寿司の神」というドキュメンタリー番組が中国で大きな話題となった。完璧の極みを追求する日本人の「匠」の精神にみな感嘆するとともに、寿司が再度流行し始めた。私が暮らす都市は人口百万人足らずだが、ここ数年で寿司屋が20軒以上にまで増加している。そのほとんどはアメリカ



カンスタイルの寿司を提供しており、アボカド、バナナ、マンゴー等のトロピカルフルーツにエビフライ、とびこを合わせ、サウザンドアイランドドレッシングをかけている。確かに視覚の色合いは鮮やかで、口当たりも豊かなのだが、甘過ぎてしつこいという感覚が生じやすい。伝統的な日本の寿司は、米酢に砂糖と塩を加えて作った寿司酢を米飯にかけてよくかき混ぜ、その上に魚、野菜、のり等を合わせて作る。味を調えるためのわさびは必要に応じシャリの中に隠され、歯で噛んだその瞬間に突然あの苦いようで甘く、甘いようで辛い感覚が口の中全体に広がる。全体的に日本の寿司は味があっさりしていて、口当たりはまさにその一切れの魚で決まる。

美味しい刺身は基本的に遠洋魚由来のもので、日本まで船で低温輸送される。それを職人たちが熟練の包丁さばきで処理した上で、わさび、醤油、ガリ、大根おろし、ミントの葉、紫蘇の葉等の食材を添える。これらの食材は多くの場合色が鮮やかで、飾りとしての役割を果たすほか、新鮮さを保ち、生臭さを消す上で役立ち、刺身の美味しさをいっそう引き出すことができる。職人たちは季節ごとに異なる形で刺身を飾る。春は桜、夏はハスの葉、秋は紅葉、冬は寒梅を用いる。時にはすっきりと、時には濃厚に、時には艶やかに、時には素朴な気品

を放つ。

20日という期間はあっという間に過ぎ去った。日本の一般大衆の生活や文化を駆け足で見ることしかできず、具体性に欠けた断片的な理解にとどまった。しかし清潔で整った街並みや、秩序正しい社会、上品な日本建築、美味しい日本料理に加え、外来文化を学び、吸収し、それを作り変える際に、融合を重視し、自国の伝統文化と両立させるという特質が、日本独特の生活様式を形作っている。これがまさに日本の魅力なのだ。

【注】

- 1 岩本通弥《以“民俗”为研究对象即为民俗学吗——为什么民俗学疏离了“近代”》文化遗产、2008(2)。原本は「民俗」を対象とするから民俗学なのか—なぜ民俗学は「近代」を扱えなくなってしまったのか(特集 シンポジウム「近代」と「民俗」)『日本民俗学』215、1998、p.17-33。
- 2 坂田稔「日本型近代生活様式の成立」南博・社会心理研究所編『続・昭和文庫』勁草書房、1990、p.7-32。なお、当該箇所引用は注3阿南論文の引用(406-407ページ)に拠った。
- 3 阿南透著、赵晖译《民俗学视野中的“消费”》王晓葵·何彬编《现代日本民俗学的理论与方法》学苑出版社、2010。原本は「消費」の民俗学的理解へ向けて(特集 日本民俗学の現在)『日本民俗学』216、1998、p.40-55。

日本民众生活方式的迷人之处 ——日本访学之旅的一点小感受

北京师范大学 刘 珊珊

日本学者岩本通弥在《以“民俗”为对象即为民俗学吗——为什么民俗学疏离了“近代”》¹一文中，对民俗研究的政治化倾向提出了质疑，并明确了柳田国男的思想并非仅仅是将民俗作为对象，而应更加重视要建立起“通过民俗进行研究的学问”。也就是说，要研究生活文化，离不开生活中的人及其所依附的生活方式背后的意义。

日本社会心理学家坂田稔曾对上世纪70年代的日本生活方式作出过总结，民俗学者阿南透认为这种生活状态延续至今：“在饮食生活方面，基本上是以米饭为主食，同时食用日、西、中合璧的副食。衣服几乎都是穿西式服装，和服则作为盛装使用。住房改成了跪坐式的榻榻米房间和餐厅、起居室并设的样式，并且，在红白喜事方面，结婚典礼和葬礼的仪式、婴儿满月时初次参拜神社以及儿童‘七五三’祝贺仪式的礼法也几乎都是固定的。在礼仪方面，鞠躬行礼的问候方式、中元节送礼、年末送礼等都形成了固定的模式。观看电视、进行体育运动和旅行等休闲活动，其大致方式也都成形了。”这段话主要从饮食、服饰、住房、红白喜事及休闲娱乐等方面进行了简要概

括，帮助我初步了解了日本民众的基本生活样式^{2,3}。

2019年11月21日至12月10日，受日本神奈川大学非文字研究中心的资助，我在日本进行了为期20天的访学。由于语言原因，我无法与日本人直接展开对话交流，因而我将从人的行为表现、生活场所、饮食等三个较为直观的方面，就我所观察和了解到的对日本民众生活文化做简单的探讨，试图发现日本社会所具有的明显特质及其成为众多国际游客趋之若鹜的魅力所在。

安静而热情的日本人

任何到过日本旅行的中国人，即使不懂日语也不会产生很大阻碍，因为我们拥有一个天然优势，在于日本大街小巷的汉字，给自由行提供了很大便利。然而，方便并不意味着我们可以随心所欲，不受约束。在日本，乘坐电车、上下电梯，还是在商场超市餐厅里结账，都要严格的遵照先来后到的原则，排队等候，日本人始终保持着高度的秩序井然。这一点在人潮拥挤的电车站尤为明显。无论是早晚高峰，或是位于市中心的繁忙站点，宽敞明亮的站台里



只能听到匆忙的脚步声，没有一丝慌乱。乘客们仿佛成为了行走的机器人，明确各自前进的线路，在没有得到指令前不得发出任何声响。此外，车厢内也极少能听到高声交谈，夫妻间、朋友间如果需要沟通，他们会用手遮挡住嘴唇，努力将声音控制在最低，一切以不影响他人为前提。

我居住的地点在神奈川大学国际寮。公寓共计六层楼，单人单间。除去一楼及负一层为公共活动空间外，二楼以上每层楼有20个房间，并设有厨房、浴室、厕所及洗衣房等公共场所。每次出入房门，穿梭于长长的走廊，很难遇见同一层楼的室友。无论是白天或夜晚，整栋楼都是安静的，我曾怀疑过所居住的楼层是否有人。之后特别留意了入夜后国际寮亮起的一排排灯，才真正确定了隔壁有人，隔壁的隔壁都有人住。公寓里是安静的，公寓外的日本街道也同样安静，只有偶尔通过的汽车声。

日本社会的流畅、有序，除了从小接受的教育之外，更重要的原因是日本人以“不麻烦他人”为人生信条。据说当地的日本大学生，过新年时也会选择留住于学校，因为担心回家后会给家人增添麻烦。更不可思议的是，一位大学生返回家中过节时，他的母亲竟然惊讶的问道：“你怎么回来了？”不能给人添麻烦，保证了人与人之间最大的自由空间，而这又必须依赖于彼此的高度自律。一旦做错事会有强烈的耻辱感，不但会被社会驱逐，自己的内心也无法容纳自己。这样的日本人看起来冷酷甚至无情，然而事实却并非如此。

刚到横滨时，我拖着沉重的行李箱走出电车站，四处张望找寻出租车。这时，两位穿着蓝色制服，负责维持公共秩序的大叔出现在了眼前。我赶紧拿出成田老师给的地址用英语询问，他们热情的为我带路，将我送到了出租车站台，并主动帮我拉行李。还有一次外出考察时，因为不熟悉餐厅的用餐方式，一对陌生的日本母女热心的为我示范，并协助我点餐。当我提出要去某个地方时，女儿在征得母亲的意见后，表示可以陪同我一起去。路上，我注意到她的母亲腿脚不便，女儿一直用力搀扶着老人。中国留学生告诉我，真实的日本人往往外冷内热，即使两位很长时间不联系的朋友，在对方需要的时候也会尽自己能力给予帮助。

雅致而实用的日本民居

因为想感受日式民居，我于11月20日晚入住于羽田机场附近的一间民宿。预定的过程中，我通过电子邮件与店员取得了联系，顺利的获得了从机场到民宿的交通线路信息：不仅说明了电车、出租车、巴士的乘坐方式，并对这三类交通所需的时间及金额进行了详细的介绍。我想象着这间民宿应该位于安静的东京郊区，人不算多，车流量也小，宽敞的街道也许适合饭后散步。

按照店员的线路说明，我走出了电车站，见到的依然是熟悉的都市风景：忙碌的四车道马路，坚固厚实的高

楼，穿着套装的职员。直至拐进一条小巷内，才开始逐渐安静下来。狭窄的道路干净整洁，两侧密集分布着颜色素雅的日式民居，墙面基本为纯色。日式民居雅致而小巧。一进门为玄关处，店员在门厅台阶上早已摆放好了拖鞋，外出的鞋收于左右两侧，靠墙处还有一张穿鞋凳。大门正对着楼梯，左侧为客厅和厨房。在一楼还设有专门的洗衣房、盥洗室及浴室。客房集中在二楼，共有三个房间，男、女厕所各一间。客房是标准的日式榻榻米，睡觉时铺好垫子，却感觉不到是睡在地面上。简单而实用是日式民居的最大特点。

日本人十分注重在居所前种上不同颜色的花草，有时候会用石头做装饰，哪怕只有屋檐下方逼仄的一角，也要让房屋显得生机而富有活力。如果家中庭院较大的话，铺满厚厚的青草地，房屋之间的小路用石块连接，满园枫叶，雅致之风，一览无余。在后来居住的国际寮，我却没有找到这样生动的自然气息。入口处是一块平地，供学生们停放自行车，上方为露台。在这块平地中间种了一颗挺拔的枫树，二楼露台则为它专门设计出一个圆圆的空缺，方便其向上生长。也许，这栋公寓一年四季的风情都要靠这颗树来展现。刚到横滨时，我注意到枫树上仍挂有不少红叶，似一位骄傲的少女穿上了红色舞裙。但在一阵疾风暴雨的摧残之后，枫树瞬间变成了一位沧桑的老人，满地的红叶触目惊心。从繁华看到衰败，从盛开看到凋零，从生欢看到死寂，这似乎正是日本人所说的物哀，最终的归向是凄美而静寂。

混杂而精致的日本料理

日式料理花样种类繁多，制作精细，讲究营养的同时，还特别强调形状和色彩搭配，被誉为“用眼睛来欣赏的饭菜”。最常见的日本食物有天妇罗，一种将海鲜、蔬菜、家禽蘸粉油炸成金黄色，再配以酱油、生姜和糖制成的酱汁食用。拉面是日本最受欢迎的美食之一，几乎在每处街角都能够找到一家拉面馆，用特制的味噌汤，加上猪肉片、紫菜、葱花、溏心鸡蛋等，鲜美的汤底直接决定了拉面的好坏。此外，日本人还特别爱吃咖喱，在印度咖喱的基础上，减少辣味的刺激，加入浓缩果泥，甜味较重。而在一般的日本家庭中，汉堡排是经典的料理之一，据说每一位妈妈都会做。虽然汉堡排的起源与美国军队进入日本后，对当地饮食文化的输入有着密切关系，但日本人却将其内在的食材结构进行了改造，以牛、猪肉混合绞肉替代纯牛肉，此外还加入了鸡蛋、蔬菜、米饭及特有的酱汁。

在日期间，最让我念念不忘的还是寿司。前几年BBC一部《寿司之神》纪录片风靡中国，大家感叹于日本人追求极致完美的“匠人”精神，同时也让寿司再次变得流行起来。在我所生活的城市，不足百万人口，近些年出现的寿司餐厅已多达二十余家。其中大部分加工制作美式寿司，用牛油果、香蕉、芒果等热带水果，再配上炸虾、蟹



子，淋上千岛酱。虽然视觉上颜色鲜艳，口感亦丰富，但也容易产生甜腻之感。而传统的日本寿司要用米醋混合加糖和盐做成的汁水，淋在寿司米上充分搅拌，再加上如鱼类、蔬菜、紫菜等制成。用来调味的芥末则根据需要藏于饭团之中，在牙齿咬下的瞬间突然跳出一丝苦而甜，甜而辣的感觉溢满整个口腔。日本寿司整体来说味道较为清淡，口感完全取决于那一片鱼肉。

鲜美的刺身基本来自远海鱼，由轮船低温运输回日本，经师傅们熟练的刀工处理后，配以芥末、酱油以及生姜片、萝卜泥、薄荷叶、紫苏叶等食材作为饰料。这些食材往往颜色艳丽，不仅可以起到装饰作用，还有助于增鲜去腥、提升刺身美味的作用。师傅们会根据季节的变换改变对刺身的装饰，春天用樱花，夏日用荷叶，秋天用红叶，冬天用寒梅，或清爽，或浓郁，或惊艳，或淡雅。

二十天的时间一晃而过，对日本民众的生活文化我只能走马观花，了解得并不具体亦非全面。但是干净整洁的

街道、秩序井然的日本社会、雅致的日式建筑、美味的日本料理，以及擅长学习、吸纳、改造外来文化，注重融合、兼顾本国传统文化的特质，形成了日本特有的生活方式，这也正是日本的迷人之处。

【注】

- 1 岩本通弥《以“民俗”为研究对象即为民俗学吗——为什么民俗学疏离了“近代”》文化遗产、2008（2）。原本：「「民俗」を対象とするから民俗学なのか—なぜ民俗学は「近代」を扱えなくなってしまったのか（特集 シンポジウム「近代」と「民俗」）」『日本民俗学』215、1998、p. 17-33。
- 2 坂田稔「日本型近代生活様式の成立」南博・社会心理研究所編『続・昭和 문화』勁草書房、1990、p. 7-32。该部分的引用基于注3阿南论文中的引用文章（406-407页）。
- 3 阿南透著，赵晖译《民俗学视野中的“消费”》王晓葵·何彬编《现代日本民俗学的理论与方法》学苑出版社、2010。原本：「「消費」の民俗学的理解へ向けて（特集 日本民俗学の現在）」『日本民俗学』216、1998、p. 40-55。

